在宅療養児をもつ保護者の養育負担感に影響をおよぼす要因の関連モデルの検討-子どもの医療的ケア度、援助要請スタイルおよびソーシャルサービス認知と利用の関連-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-06-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齊藤, 麻子 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2003388

論文内容の要約

学生番号	3215006	指導教員確認		主　査	髙橋　眞理　先生
氏　　名	齊藤　麻子			副　査	青木　きよ子　先生
				副　査	西田　みゆき　先生

学位論文名	在宅療養児をもつ保護者の養育負担感に影響をおよぼす要因の関連モデルの検討 −子どもの医療的ケア度、援助要請スタイルおよびソーシャルサービス認知と利用の関連−
訳タイトル	A Model of the Factors Affecting the Sense of Burden of Childcare in Caregivers of Children in Home Care -Association with Child's Level of Medical Care, Help-Seeking Style and Perception and Utilization of Social Services-
共著者	

論文内容の要約（1,000 字～1,500 字）

【目的】在宅療養児をもつ保護者の「援助要請スタイル」と「ソーシャルサービス認知(PSS)」と「ソーシャルサービス利用(USS)」および「子どもの医療的ケア度（医ケア度）」が「養育負担感」におよぼす影響を関連モデルの検証から明らかにすることである。

【方法】予備研究は、質的記述的研究により在宅療養児の就学移行期における保護者の思いについて分析した。本研究では、「医ケア度」「援助要請スタイル」および「PSS」「USS」が保護者の「養育負担感」に影響をおよぼすと仮定した関連モデルを構成し、在宅療養児をもつ保護者を対象に質問紙調査を実施し、共分散構造分析による解析から関連モデルの検証を行った。

【結果・考察】予備研究では保護者 5 人のデータ分析から、他者に援助を求めることに消極的で不安や負担が大きい保護者の存在が明らかとなった。本研究では 104 人の回答（回収率 45.8%）があり、対象者の 99%が母親、子どもの平均年齢 8.9（SD=4.9）歳、医療的ケア度 18.3（SD=13.7）点、養育負担感 46.2（SD=11.5）点であった。「医ケア度」は「養育負担感」「PSS」および「USS」間に正の相関（rs=.26～.62, p<.05）があった。また、医療関係者と配偶者・家族に対する「援助要請スタイル」は〈過剰型〉が最も多かった。

援助要請スタイル分類別に、仮説モデルに基づく 4 モデルを仮定し共分散構造分析を行った結果、「養育負担感」と「PSS」「USS」との間に直接の関連は見られなかった。最もＡＩＣ値が良好なモデルは、医療関係者への〈過剰型〉と配偶者・家族への〈回避型〉による「援助要請スタイル」型および「医ケア度」が「養育負担感」に影響をおよぼし、また「医ケア度」と「PSS」が「USS」に影響をおよぼしているモデル（CMIN/df＝0.783, p=.618, CFI＝1.000, RMSEA＝.000, AIC＝45.043）であった。

さらに、医療関係者への援助要請〈過剰型〉得点が高い保護者は「養育負担感」が低く、配偶者・家族への〈回避型〉得点が高いと「養育負担感」が高いことが明らかとなった。この結果から、保護者が医療関係者への援助要請を積極的にできること、配偶者・家族への援助要請を回避しないことが「養育負担感」の軽減には重要であり、必ずしもソーシャルサービス利用の促進にこだわるのではなく、家族関係のアセスメントと医療関係者に相談等の援助要請をしやすい環境を調整する支援の重要性が示唆された。

【結論】在宅療養児をもつ保護者の「養育負担感」には「医ケア度」と「援助要請スタイル」が影響しており、他者に援助要請できることが「養育負担感」を軽減させることがモデル検証から明らかとなった。今後は、在宅療養児の保護者に特化した養育負担感のアセスメントに活用できる援助要請スタイル尺度の開発が課題である。